

2002年度修士論文要旨

沖縄県西表島白浜・干立村落における県外からの転入者の現状

Non-Okinawan newcomers' incorporation into the local society
of Shirahama and Hoshidate Villages, Iriomote Island

地理環境学コース 高田 夏子 Natsuko TAKADA

1972年の日本復帰以前の西表島は「眠れる宝庫」と評され、農業、林業、鉱業などにおいて開発されるべき島として琉球の希望の島であった。ところが日本復帰にともない「世界に類を見ない自然の宝庫」という日本国からの新しい評価により、開発から自然保護へ180度の方向転換がされる。これにより、観光産業にうまく転換できた島民もいたが、多くの島民は職を求めて離島していった。

このような歴史的背景により、日本復帰前から西表島に暮らす人々と、復帰以降に県外からその豊かな自然にあこがれて転入してきた人々では開発に対する考えが異なる。西表島の自然を多少は犠牲にしても開発を優先して島の活性化を希望する人々と、自然保護を第一に考える人々という対立関係を「地元」対「よそ者」(県外出身者)という二項対立に単純化されて語られることが多い。

しかしながら、「地元」と「よそ者」という二項対立以前に個人の考え方が異なる。本研究では「地元」が「よそ者」である県外出身者を「地元」の一員として受け入れられる可能性に着目した。

具体的には地元意識の強い村落で暮らす県外出身者に注目した。西表島の県外出身者の多くは、観光の拠点となっている上原地区に転入している。そのような中であえて観光拠点から離れ、地元出身者で形成された村落で暮らす県外出身者は、地元の人と関わりたいという意識が強いはずである。県外出身者たちの村での生活様式を調査し、また地元出身の村人たちが彼(女)らどのように受け入れているかを知ることで、「地元」と「よそ者」を超えた新しい関係性が見出せるはずである。

研究方法は、白浜村落と干立村落の県外出身者合計24人に個別に聞き取り調査を行った。転入動機、村での生活、問題点などを自由にお話いただいた。また、地元出身の住民にも村落の歴史、現在の状況、転入者に対する感想をうかがった。そして村落最大のお祭り、白浜の海神祭、干立の節祭に参与観察し、県外出身者の祭りでの役割に着目した。

白浜村落における県外出身者は人口137人中30人、干立村落では88人中24人で、その大半は20代、30代の若者である。彼(女)らは村の自治組織である公民館活動にも積極的に参加し、村の一員として活躍していることが明らかになった。

白浜、干立両村落ともに、猪猟、釣り、貝取り、山菜取などのマイナー・サブシステムが盛んであるが、それを県外出身者は地元出身者から教わり、楽しみを共有している。

また、県外出身者のほぼ全員が「閉塞感はない」と回答したが、その理由として3つ挙げられる。1つはほとんどの県外出身者が村の外で働いて収入を得ていること、2つ目は血縁がないこと、3つ目は村の外にいくつものネットワークを持っていることである。

県外出身者でも数年で転出を考えている者と、永住を希望している者がいる。村にとって重要なのは永住希望の県外出身者であり、彼(女)らを受け入れる家族向けの住宅は現在不足しており、新設が望まれている。

以上の結果から、西表島の村落共同体の単位では、「よそ者」である県外出身者が地元出身者と良好な関係を保っていることが確認できた。

西表島という島の単位にもどして考えるとき、彼(女)らのような地元へ溶け込んでいる県外出身者の重要性が浮上する。地元出身者と県外出身者の両方の心情を理解する県外出身者が、現在西表島が抱えている環境問題を「地元」対「よそ者」という単純な二項対立から、新たな関係性へと変えていく重要な役割を担っていくと結論した。

公刊記事：

高田夏子 2004. 西表島の「月ヶ浜リゾート」開発問題. 地理, 49-1, 55-60.